

またも 斜めから見た考古学

中 島 佐久男

日本中に激震を起こした旧石器ねつ造事件も徐々に余震も収まり、なんとなく日本的な収束を迎えたような今日この頃。考古学に興味はあるものの「こうこがく」の「こ」の字程度で考古学を周囲から眺めている私ですので、3年も前のことを今更お前に言われたいと非難は承知の上でねつ造事件に関連して感じていることを書いてみます。

65才を過ぎる頃から第二の勤めも終わり暇をもてあます者が多くなるせいかな、それとも平均寿命と自分の年齢との差が段々少なくなるせいかな？、この四、五年は高校・大学の同期会やクラス会の誘いが毎年ようになりながらも飽きもせず誘いにのり参加しておりますが、友人達との歓談で旧石器ねつ造事件の前と後では会話に変化があることを感じ考えさせられました。

リタイア後の賀状に“発掘作業で汗と泥にまみれながら楽しんでいます”と近況報告してありますので、旧石器ねつ造事件前は「お前にしては良い趣味を持ったな」・「俺も一度、遺跡の報告会見学会に行ってみようかな」・「あの遺跡は大切に・・・」など考古学や文化財に好意的な雰囲気での会話でした。

それがねつ造事件後は、「新聞に載っている考古学の成果は信用していいの」・「あれは（旧石器ねつ造遺跡の調査）税金の無駄遣いではないか」・「教科書の書き換え問題にまでなっているが、ねつ造事件に関連した考古学者は今どうしている」などから次第に厳しい会話となり、考古学から一歩離れるような友人達の話しぶりに、ねつ造事件の影響をつくづく感じました。友人曰く「この苦口は水産で飯を食った君だから話した、もし考古学関連の職業だったらオブラートに包んで話したよ」に苦笑いです、恐らく私も百舌鳥古墳群を大阪着陸前に見なかったら還暦から考古学に興味を抱くこともなく、中間派の一人として友人と同様の発言をしていたらろうと考えてしまいました。

考古学シンパとアンチ考古学の両端に属す人は一部で、大半がその時の状況で流動する中間派ではないでしょうか、黒塚古墳やホケノ山古墳の現地説明会に二万人いや三万人と新聞は大騒ぎして書いてありましたが、考えてみるとそれは畿内人口の0.2~0.3%に過ぎません、新聞が書き立てるほど日本中が湧いていたのではないと思います。

もし考古学ファンや歴史ファンが人口の10%もいたら歴史関連書は売れて売れて出版社はホクホクで笑いが止まらないでしょう。考古学ファンの人たちはねつ造事件に影響されることも無く支援するでしょうが、中間派の人たちの中には考古学を見る目が変わり一歩退いた人も多いのではないのでしょうか。このような時期だからこそ一人でも多く考古学側に呼び戻さなければ、もし貴重な遺跡保存問題が起こっても住民の支援の輪が拡がらず経済価値・経済効果優先派に太刀打ちできない事態になるかもしれません。

これは旧聞に属しますが、昨年1月26日の日本経済新聞の文化欄に遺跡発掘冬の時代の見出しで記事が載っていましたが、極端な言い方をすれば開発事業に依存した状態が続いてきた考古学界、今後は開発事業も減るでしょうし、それに国も自治体も財政ピンチが続きます、“衣食足りて礼節を知る”ではありませんが、緊縮予算になる今後は歴史文化

関係にどれくらい予算が配分されるのでしょうか。

文化財保護法ができる以前は発掘調査資金の捻出に苦労しながらの調査で苦労は大変だっただろうと想像します、それが文化財保護法施行後は錦の御旗を掲げた考古学となり学界周辺的环境も徐々に様変わりし、極端な言い方をすれば一般社会と同様に開発バブルの時流に乗った考古学になったのではないのでしょうか、バブルに浮かれ国の指導と監督保護に頼りきり自己努力しなかった業種の苦難の現状を、あれは企業の問題と無視するのではなく他山の石として考古学界も考えておく必要があると思うのですが。

あのねつ造事件も藤村個人の問題ではなく、文化財を保護すると言う観点からの一般市民への啓蒙活動が知らぬ間に地方活性化の話題作りと一体化してしまい、またマスコミを有効に活用しての文化財保護運動が、いつの間にかマスコミに踊らされ迎合してしまい新発見に対しての反対異論には答えず無視しても、その上検証も報告書なしで既定事実化していても容認していた考古学の偉い？先生達、このような考古学界の体質が根本原因にあるのではないのでしょうか、これでは科学的考古学の看板が泣きます。

文化財保護法に基づく国や自治体の行政考古学は設置の目的や性質から成果が少し誇張されても已むを得ない事情もあると思いますが、それを大学や研究所の学術考古学が馴れあいで賛同するのでなく、冷静に分析検証し行き過ぎにプレーキを掛けるようにすれば旧石器事件の二の舞防止に役立つでしょうし、異論討論が考古学の活性化にもなります。

次にこれは考古学に興味を持った頃から感じていることですが、見学会・講演会など考古学関係の催しに参加している人の大半が高齢者であることです、高齢者が暇だからと言うこともあります。20年先30年先はどのようなのか考えさせられます、会場が満席になったから見学会に何万人来たから成功だは行政考古学からの一面で、純粋に考古学の将来を考えると若年者参加の割合が増えてこそ成功ではないのでしょうか。

少年時代は一寸した刺激でもすぐ興味を示しますが、成人後は未知の分野を覗いて見ようと言う意欲も機会も少なく（私だけかな）、文化財保護の輪を拡げるには少年時代に文化財保護の種子を撒いて育てる必要があると思います。

長崎県が県内各地で古代生活体験の催しをされていることは評価しますが、一回きりでなく四・五年目には次の新企画で巡回を実施すると、小学校時代に一回か二回は参加でき印象に残り種子になるはずですが、考古学本来の守備範囲ではないかもしれませんが密接な関連分野である博物館などでは65才以上は無料とか割引の優遇がありますが、それよりも高校生以下を全国の博物館などで無料にし、どんどん入館して貰うことの方が必要と考えます。何故なら来館する高齢者は興味があるから来館する人が殆どだろうと思います、それとは違い生徒達は興味が無くても学校の行事で、また友人との付き合いで仕方なく来館します、その生徒に少しでも多く歴史や文化に関心を持ってもらうようにすることが必要ではないのでしょうか。それには高校生以下を全国の博物館・資料館等で無料解放し気軽に来館させることが一番で、興味なく入館した生徒の何分の一かでも歴史や文化に関心をもってもらえれば成功であり、将来は有料入館するお客様になって貰える先行投資と考えます。

以上、生意気な奴とお叱りは承知の上で、私の勝手な思い過ごしかもしれませんが危惧していることを書いてみました、生来の文章下手で文脈不明な点もあることと思いますが宜しくご判読下さい、今回も自分の浅学無知は棚に上げての駄文お許し下さい。